

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席 主
研究員17 都市の景観を
考える

だいぶ前段が長くなつてしまつたが、ここで軌道に戻して本来の課題である「心理的景観の造形」について語りたい。

心理的景観の造形の一つのルーツとして、「都市の品格」という言葉を挙げておきたい。品格とはまぎれもなく「文化・芸術」がインセンティブ（目標を達成するための刺激、誘因）された空間の造形であり、極めてジャンルの広いものと考えられる。

「文化・芸術」という一くくりのなかには、音楽、演劇、舞踊、そして映画、アニメから絵画、彫刻といった

芸術文化、また長い歴史の中で十分醸成された都市やまちの造形、そしてアイデンティティを象徴する寺町・門前町や、城下町の街並みと、それを構成する一つひとつの建物による建築文化。そして、そこに暮らす人々によつて、知らずのうちに培（つちか）われた風情や佇（たたず）まいが色濃く残る生活文化。集落や地域の人々によつて継承された郷土芸能といわれる伝統文化等々、文化・芸術の対象は多岐にわたり、極めて奥の深い分野である。

また、近年においてはスポーツ（施設）を通じたレガシー文化や、そのものを称したスポーツ文化も定着しつつある。

これらは、そこに暮らす人々のみならず、そのまちを訪れる人々に感動や生きることの喜びをもたらすことで、人生を豊かにするばかりか、活力ある社会を創生していくうえで大きな原動力となるものであり、都市やまちの「質」を高めるうえでも重要な役割を果たすものである。

中でも、それは退職等により社会から一線を引き、そこに暮らす

高齢者にとつても、社会とつながり、健康で生きがいある安心な生活を送るための環境づくりのツールとして極めて有効な素養であり、その役割も大きいといえる。

加えて、これらのさまざまな文化・芸術は、時に人々の移住・定住のインセンティブとなり、邦人観光客のみならず、インバウンド（訪日外国人客）の観光ルート選択にも多大な影響を与えるものである。

まさに文化・芸術の秘める力は、人を動かす誘導力を持つばかりか、観光資源としてもそのまちの商品力そのものであり、ブランド力でもある。

これが本章のテーマでもある「心理的景観」の造形なのである。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）

1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長